

特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲児に対する 教師の関わりの検討

Examination of teachers' approaches to children who need special support and their classmates.

小池 優衣

Yui Koike

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：特別な教育的支援を必要とする児童，通常学級，教師の関わり

Key words : Children who need special support, Regular classrooms, Teachers' approach

1. 研究目的

近年，共生社会の形成に向け，教育現場においては，障害のある子どもが障害のない子どもと共に教育を受ける仕組みであるインクルーシブ教育システムの構築が目指されている（文部科学省，2024）．このような環境を整えるためには，特別支援教育が必要不可欠であり，併せて推し進められている（文部科学省，2024）．

上記の方針を進めていくために，現状把握が必要であるとして，令和4年に「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態を把握するための調査」が行われた．調査結果によると，通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童は，10.4いることが示された（文部科学省，2022）．このことから，小学校では1学級に1～3人程度の特別な教育的支援を必要とする児童が在籍していることが推察される．

このような状況に対し，学校では校内委員会の設置など，特別な教育的支援を必要とする児童を学校全体で支援する体制を整えることが推進されているが（文部科学省，2017），現状としては，令和4年度の調査で著しい困難を示す児童生徒に該当した者のうち，70.6%が学校としての支援を受けるに至っていない状況であり（文部科学省，2022），通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童を担任している教師の負担の大きさが懸念される．

実際，先行研究において，特別な教育的支援を必要とする児童を担任する教師が特性の理解や具体的な対応の方法（木村・芳川，2006），他児との

関係調整（角南，2018）などに困難感を抱くことが示されている．

一方で，特別な教育的支援を必要とする児童も対人関係や学級環境に不適應を起こしやすく，教師からの支援が重要になること，また，クラスメイトらも特別な教育的支援を必要とする児童の理解の困難さから受容しがたく関わりが必要な場面で困難感が生じる場合があることなどが示されている．そこで，本研究では，特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲児に対する教師のより良い関わりや教師に対する有効なサポートを考察する材料として，特別な教育的支援を必要とする児童や周囲児に対する教師の具体的な関わりについてインタビュー調査を実施し，整理することを目的とした．

2. 研究実施内容

【調査対象者】特別な教育的支援を必要とする児童が在籍する通常学級を担任した経験のある小学校教師4名．

【調査方法】縁故法により，調査依頼を行った．同意を得たのち，Zoomにて半構造化面接を用いたインタビュー調査を実施した．

【調査内容】特別な教育的支援を必要とする児童を含む通常学級を担任した際の経験について尋ねた．

- ①児童の当時の状況（学習面，行動面等）
- ②教師として関わりや対応を行った場面について
- ③より良い関わりや対応のために行ったこと
- ④今振り返って，自分の対応をどのように評価しているか

4名の教師に対して実施した個別インタビュー調査の結果, “より良い関わりのために行ったこと”, “上手くいった関わり”, “上手くいかなかった関わり”, “今思いつくより良い対応”, “今でも対応の仕方が分からないこと”, “当時あると良かったサポート”等について, 教師の考えや感情を交えながら聞き取ることができた。

“より良い関わりのために行ったこと”では, 【保護者との連携】【教職員・専門機関との連携】【特別な教育的支援を必要とする児童への直接的な働きかけ】等が語られた。特別な教育的支援を必要とする児童をより良く支援していくためには, 保護者と子どもに関する肯定的な共有をする機会を頻繁に設けることで保護者との信頼関係を構築することや, 他の教職員に対応に関する相談を行うことでより良い関わりのヒントを得たり, 1人では対応しきれない場面でサポートに入ってもらったりすること, 特別な教育的支援を必要とする児童に向き合っていく中で理解した特性に合わせて対応をカスタマイズしたり, 指導してばかりにならないよう普段の肯定的な関わりを意識したりするといったことが重要であると考えられた。

“上手くいった関わり”では, 特別な教育的支援を必要とする児童の特性に合わせた関わりや心理的援助, 周囲児との関係調整になっていたのではないかと考えられるものが挙げられた。これらの関わりが実現された背景には, それぞれの児童にしっかりと向き合っておりより良い関わりを試行錯誤した教師らの努力があったことが考えられた。

一方, “上手くいかなかった関わり”では, 児童の心理状態や特性への分からなさや, 特別な教育的支援を必要とする児童とクラスメイトに対して1人で対応することへの限界から生じていたと考えられるものが多数あり, 担任教師へのサポートが必要不可欠であると言える。

“当時あると良かったサポート”では, 「必要な時にサポートに入ってくれる存在」があげられていた。

3. まとめと今後の課題

教師は, 特別な教育的支援を必要とする児童に対してしっかりと向き合い, より良い関わりを試行錯誤する中で上手な関わりを実現させているこ

とが推察された。一方で, 通常学級の担任である以上, 計画に沿って授業を進めることや, 他児への平等性などを意識する必要があること, 個別の対応を常に実施することには限界があることも示された。このような状況に対しては, 教師らが求めるように「必要な時にサポートに入ってくれる存在」も学級運営をスムーズにする上で重要であると考えられる。他にも, より良い関わりの模索をサポートできる存在として, スクールカウンセラーなどの心理の専門家の存在が挙げられるだろう。特別な教育的支援を必要とする児童の心理状態や特性に関する理解を深めるためのサポートや, 教師が行っている良い関わりを支持しエンパワメントすることで教師の心理的負担を軽減することができるのではないだろうか。

また, 今回の研究では2～7年目の教師が対象となったが, 語りの内容から, 経験を重ねる中で新たに習得した対応方法を, 過去のケースにも適応可能だったのではないかと振り返る場合があることが示唆された。よって, さらに経験を積んだ教師を対象として調査を行うことで, “より良い関わりのために行ったこと”や“上手くいった関わり”に関するより多くのデータが得られるのではないかと考えられる。

主要参考文献

文部科学省 (2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について 文部科学省 Retrieved February 14, 2024 from https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf.

角南 なおみ (2018). ADHD 傾向がみられる子どもとの関わりにおいて生じる教師の困難感のプロセスとその特徴: 教師の語りによる質的研究 発達心理学研究, 29(4), 228-242.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成(B) (課題番号:DB2415) 「特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲児に対する教師の関わりの検討」を受けたものである。